様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　５ 月 １５ 日現在

機関番号：１２３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０４３４２

研究課題名（和文）教育実践経験への意味づけと教師としての成長－自伝的推論の観点から

研究課題名（英文）Meaning-making to educational practices and professional development as teachers: Examination of autobiographical reasoning.

研究代表者
佐藤　浩一（Sato, Koichi）

群馬大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：４０２２２０１２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は教育実践経験への意味づけ（自伝的推論やリフレクション）と教師としての成長との関連を検討した。質問紙調査と面接調査が、大学生と現職教員に対して行われた。世代やキャリアに関わらず、ポジティブな経験に対する意味づけが、成長や教職アイデンティティや適応につながることが明らかになった。また面接調査では、こうした結果を具体的に示すエピソードが聴き取られた。さらに、学部生の経験学習プロセスを促進する条件や抑制する条件、周囲からの支援が有効に機能する条件、現職教員が現場での実践と研究を通じて成長するための条件などが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は大学生と幅広い世代の現職教員、また教職大学院修了者という多様な協力者について、教育実践経験への意味づけ（自伝的推論やリフレクション）と、教師としての成長やアイデンティティ、適応などと関連することを、質問紙調査・面接調査・参与観察という重層的な方法で明らかにした。教師教育の研究と自伝的記憶研究を結びつけたところに学術的な意義がある。さらに調査結果に基づいて、ポジティブな経験を意味づけることの重要性や、教育実習のあり方、教職大学院の教育研究のあり方について提言を行ったところに、社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study examined the relationship between the meaning of educational practice experience (autobiographical reasoning and reflection) and growth as a teacher. Questionnaire surveys and interview surveys were conducted on university students and in-service teachers. It has become clear that the meaning of positive experiences, regardless of generation or career, leads to growth, teaching identity and adaptation. In the interview survey, episodes showing these results were heard. Furthermore, the conditions for promoting and suppressing the experiential learning process of undergraduate students, the conditions for effective support from the surroundings, and the conditions for in-service teachers to grow through on-site practice and research were clarified.

研究分野：教育心理学

キーワード：教育実践　教員　省察　教育実習　自伝的記憶　自伝的推論

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

## １．研究開始当初の背景

人は過去に経験した出来事を記憶にとどめる。それだけでなく、その出来事を振り返り意味づける。過去経験の記憶は「自伝的記憶（autobiographical memory)」、それを意味づけることは「自伝的推論（autobiographical reasoning)」と呼ばれ、研究が蓄積されつつある。過去経験を記憶に残したり思い出したりすることは、乳児でも、またヒト以外の動物でも可能である。これに対して、過去経験を意味づける「自伝的推論」は、青年期以降の自伝的記憶に独自のものである。自伝的推論は一種の内省的な思考であり、それに該当するものは高齢者の回想、心的外傷からの回復と成長、過去経験からの学習、ライフストーリーなど様々な研究テーマの中に見出すことができる。

教師の成長については近年、ナラティブ・アプローチが着目されている。これは教師を「省察する実践家」としてとらえ、自らの実践経験を物語り意味づけることを通して、成長していくプロセスを探るアプローチである。教育学者によって検討が進められているが、ナラティブを通した意味づけとは、上に述べた「自伝的推論」の一つの表れに他ならない。自伝的推論研究の知見を生かすことで、教師の成長に関して新たな研究の可能性を開くことが期待される。

## ２．研究の目的

人は過去経験をエピソードとして思い出すだけでなく、過去経験を意味づけたり、その後の指針や教訓を引き出すことで過去を現在・未来に生かしたりする。このような内省的思考は「自伝的推論」と呼ばれ、青年期以降に独自のものである。本研究では、「教師」に焦点を当てて、教育実践経験に対する自伝的推論が教師としての成長にどのようにつながるのかを、質問紙調査・面接調査・参与観察など通して検討する。

具体的には以下のサブテーマについて検討を進める。

（１）実践経験への意味づけを捉える尺度として、既存の「自伝的推論尺度」に加えて、「リフレクション」の尺度を構成する。また教師としての成長に関わって、「成長感」「教職アイデンティティ」「周囲からのサポート」の尺度を構成する。

（２）初任者～50 歳代までの幅広い年齢層を対象に、教育実践経験（ポジティブ経験とネガティブ経験）に対する意味づけを検討する。あわせて「教職アイデンティティ」や適応などの尺度を用いた検討を行い、意味づけと教師としての成長との関連を検討する。

（３）教職大学院の修了者を対象に、２年間の大学院生としての経験がその後の成長にどう結びついているか、質問紙調査と面接調査、参与観察を通して明らかにする。

（４）勤務校管理職に対する質問紙調査、勤務校管理者や教育委員会での面接調査を通して、教職大学院の修了者の成長について第三者の観点から評価する。

（５）教育学部で教育実習を経験した学生を対象に、実習期間中の経験への意味づけ、リフレクション、適応、成長感、教職アイデンティティ、周囲のサポート等がどう関連するか、質問紙調査と面接、参与観察を通して明らかにする。

（６）以上を通して、教育実践－意味づけ－成長の円環的なプロセスをモデル化し、自伝的推論の理論を精緻化する。さらにその成果に基づき、学部実習生～初任者～中堅までの幅広い層に可能な、教師教育の方法を提案する。

## ３．研究の方法

本研究は①質問紙調査、②面接調査、③参与観察という多様な方法を用いて、教育実践経験に対する自伝的推論が教師としての成長にどうつながるかを明らかにする。具体的には、質問紙調査への回答について面接調査で深く掘り下げる、面接調査で明らかになった傾向を個別の事例で具体的に捉える、実践の様子を参与観察したうえで質問紙調査・面接調査を実施する、といった方法を用いる。

## ４．研究成果

### （１）尺度の作成

以下の尺度を作成し、信頼性・妥当性を確認した。①～③は現職教員と大学生に共通に活用できる。④～⑦は教職大学院を修了した現職教員の研究に用いる。⑧～⑫は教育実習を終えた大学生の研究に用いる。

①自伝的推論（簡易版）
②想起特性
③教職アイデンティティ
④教職大学院生が２年次に実践する上での周囲からのサポート
⑤教職大学院生が２年次に実践・研究することの負荷
⑥教職大学院生が実践・研究を通して感じた職能成長
⑦教職大学院修了者の資質を学校管理職が評価する指標
⑧学部生が教育実習で感じた自己有用感

⑨学部生が教育実習で取り組んだリフレクション
⑩学部生が教育実習で取り組んだリフレクションのツール
⑪学部生が教育実習で感じた成長感
⑫学部生が教育実習に取り組む上での周囲からのサポート

**（２）教育実践経験に対する意味づけ（現職教員での検討）**

人は自身の経験を様々に意味づけ、どれがアイデンティティにつながる。こうした意味づけは従来、ネガティブな経験に関して検討されることが多かった。しかし子どもたちと日々関わる教育実践の場では、ネガティブな経験（例：失敗）から学ぶだけでなく、実践の手応えや喜びを意味づけ、アイデンティティを確認することも多いのではなかろうか。

こうした問題意識から、30 歳代～50 歳代の現職教員 351 名を対象に質問紙調査を行った。最近 1 年以内とそれ以前の教育実践経験の中から成功経験と失敗経験を各１想起させ、自伝的推論・想起特性の尺度に回答を求めた。あわせて自尊感情・人生満足度・アイデンティティの基礎と確立・教職アイデンティティの尺度に回答を求めた。その結果、成功経験は失敗経験に比べて鮮明に想起され、強い自伝的推論を引き起こしていた。また成功経験に対する自伝的推論が自尊感情、人生満足度、アイデンティティの確立と有意に関連し、さらに教職アイデンティティを有意に予測することが見出された。以上の結果から、成功経験を意味づけることが、教育実践上でのアイデンティティ危機への対処方略となることが示唆された。

**（３）教職大学院での学修経験の意味づけ（教職大学院修了者での検討）**

群馬大学教職大学院では 1 年次は理論を中心とした学修に大学で取り組む。そして 2 年次にはそれを生かして学校現場で、実践と研究に取り組む。こうした経験はかなり負荷のかかるものであるが、同時に成長の契機ともなる。何が負荷や、その経験からの成長に影響するのであろうか。

こうした問題意識から、大学院を修了し現職教員として勤務している 102 名を対象に、２年次に現場で研究と実践をする上での負荷と周囲からのサポート、実践・研究を通して感じた職能成長、研究への取り組みに対する自伝的推論と想起特性を問うた。

その結果、修了者は研究への取り組みを鮮明に肯定的な感情を伴って想起していた。またその取り組みが自分にとって重要であり、大切なことを学んだと意味づけていた。さらに研究の内容に応じて運営力・生徒指導力・授業力が伸びたと考えていた。2 年次に勤務と両立させつつ研究を進めることは多くの者にとって負荷が強かったが、周囲からのサポートがあったり、1 年次から見通しが持てていたり、手応えが感じられたりしたことで、適度な「ストレッチ経験」として評価されていた。一方、こうした条件が整わない場合には非常に強い負荷を感じていた。

さらに 25 名の修了者に面接調査を実施した。協力者の多くは大学院在籍中に筆者の授業を受講したり研究指導を受けていたりしており、当時の観察を踏まえての面接であった。その結果、研究を促進する条件（例：実践の手応え、指導教員の支援）や抑制する条件（例：通常業務の多忙）など、質問紙調査から明らかになった内容についてより具体的に深めることができた。さらに入学前の状況や 1 年次の状況、大学院での研究がその後にどう生かされているかが聴き取られた。

以上の結果をもとに、今後の教職大学院における教育研究のあり方、学校現場との連携のあり方等について提言がなされた。

**（４）教職大学院修了者の職能成長に関する第三者からの評価**

教職大学院修了者の感じた意味づけや職能成長は、本人の主観的なものに過ぎないのであろうか、それとも第三者の観点からも確証できるものであろうか。

こうした問題意識から、修了者が勤務する学校の管理職に、修了者の教員としての資質能力を評価する尺度への回答を依頼した。尺度は群馬県の教員育成指標をもとに「学習指導・教科経営等」「生徒指導・学級経営等」「学校経営」の 3 領域について各 3 観点から、キャリア段階相当の資質を有しているかを問うものとなっていた。その結果、キャリア段階 1（おおむね 20 代）からすでに一定の資質を有していること、キャリア段階が上がるにつれて資質が次第に充実していくことが認められた。一方、評価が低いものも若干見出され、現在の校務分掌等との関わりから考察が加えられた。

さらに修了者が勤務している学校の学校長（6 名）や、現職教員を大学院に派遣した教育委員会（県教委と 6 つの市町村教委）の担当者に面接調査を行った。大学院に派遣した当時の期待が実現されたか、修了者の職能成長、今後何を修了者に期待するか等を中心に詳細に聴き取った。その結果、いずれの学校長も教育委員会担当者も、修了者の研究成果や職能成長を高く評価し、学校現場でのミドル・リーダーとして期待していた。

以上より、修了者が自己評価した職能成長や実践・研究の意味づけは、本人による主観的なものであるだけでなく、第三者の視点からも十分に確証されるものであると言える。

**（５）教育実習での経験に対する意味づけやリフレクション（教育学部生での検討）**

以上は、現場で学校教員として勤務している者に関して行った研究である。それでは初めて学校現場で教育実践に取り組む学部生たちは、自らの経験をどのように意味づけたり振り返ったりしているのだろうか。それは成長感や教職アイデンティティ等とどう関連するのであろうか。こうした問題意識から、実習生の様子を参与観察すると共に、質問紙調査と面接調査を実施した。面接では実習中に観察した場面や実習録を参照しつつ、質問紙調査で明らかになったことについて具体的に聴き取った。

質問紙調査１では、実習期間中の成功経験・失敗経験の想起を求め自伝的推論と想起特性の尺度に回答を求めた。あわせて教職アイデンティティ尺度、実習での自己有用感、自尊感情・人生満足度・アイデンティティの基礎と確立の尺度に回答を求めた。その結果、成功経験に対する自伝的推論と実習中に感じた自己有用感が、教職アイデンティティと自尊感情などの適応度を高めること、特に、自伝的推論の効果が強いことが示された。面接調査は６名の協力者に対して行われた。６名はいずれも実習中の成功経験と失敗経験を「大きな意味を持つ」「当時の自分を表す」などと強く意味づけていた。またこうした意味づけを通じて、実習経験が自伝的記憶として自己機能・社会機能・方向づけ機能を果たすことが示された。

質問紙調査２では実習中のリフレクションについて、どの程度振り返ったか、振り返ったことを別の機会に生かしたか、実習録等はリフレクションに有効だったか、周囲からどういう支援を受けたか、実習を通して成長したかを検討した。その結果、実習生は日々の経験に対してリフレクションを行っていること、授業実践や児童生徒対応の面で成長を感じていた。さらに周囲からの支援以上に、経験を振り返り次に生かそうとする態度が、成長感を強く予測していた。一方、実習録については負担に感じる者も多く、リフレクションのためのツールとして十分に機能しているとは言えなかった。面接調査は５名の協力者に対して行われた。周囲からの支援の実例や、経験を振り返り次に生かした実例が聴き取られた。同時に振り返りを次に生かす過程を促す条件（例：複数回の授業を短期間に経験する、リフレクションで気づいたことをキーワードかして意識する）や、実習録をリフレクションのツールとして活用する事例（例：「課題」「改善」といった項立てをする）、周囲からの支援を支援として受け止められるための条件（例：ニーズと支援が合致している）なども析出された。

以上の結果をもとに、今後の教育実習のあり方や実習録のデザインなどについて提言がなされた。

### （６）教育実践－意味づけ－成長のプロセスモデルと実践への提言

このように学部学生と現職教員を対象に行った検討から、多岐にわたる成果が得られた。そのなかで世代やキャリアにかかわらず、教育実践経験－特にティブな経験－は強く意味づけられ、適応、教職アイデンティティ、成長感に結びついていることが示された。一般に「リフレクション」というと、「反省」「内省」として、失敗を振り返るイメージが強い。しかしポジティブな経験とネガティブな経験の両者をバランス良く振り返り、自分にとっての意味を考え、次に生かすことが重要なのであろう。これを自発的に行うことが難しい場合には、そのためのツールとなるよう実習録のデザインを工夫したり、周囲から積極的に内省支援を行ったりすることが考えられる。

さらに特に教職大学院での研究と実践に関しては、２年間の学びを充実させるための具体的な指針が、「組織編制」「教員によるガイダンス」「カリキュラム」「入学前～修了後の連続性」「他機関との連携」などの観点からまとめられ、提案された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計15件（うち査読付論文　12件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　12件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>佐藤浩一 | ４．巻<br>69 |
| ２．論文標題<br>教職大学院修了生が振り返る「課題研究」の意味と職能成長 | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編 | ６．最初と最後の頁<br>195-220 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>佐藤浩一・新藤慶 | ４．巻<br>69 |
| ２．論文標題<br>教育委員会への調査からみられる群馬大学教職大学院の成果と改善点の検討－院生への期待・研究・修了後の評価に着目して－ | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編 | ６．最初と最後の頁<br>179-194 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>佐藤浩一・新藤慶 | ４．巻<br>37 |
| ２．論文標題<br>群馬大学教職大学院における小中学校教員の成長－学校長との面接に基づく検討 | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>群馬大学教育実践研究 | ６．最初と最後の頁<br>225-237 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>新藤慶・佐藤浩一・田村充 | ４．巻<br>37 |
| ２．論文標題<br>群馬大学教職大学修了生の「教員としての資質」の現状と課題－教員育成指標をふまえた勤務校管理職への調査に基づいて－ | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>群馬大学教育実践研究 | ６．最初と最後の頁<br>239-254 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>山口陽弘・佐藤浩一・新藤慶・山崎雄介 | 4．巻<br>37 |
| 2．論文標題<br>教職大学院における学修を促進する要因の検討－12年間の実践と成果検証を踏まえて－ | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>群馬大学教育実践研究 | 6．最初と最後の頁<br>255-265 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>佐藤浩一 | 4．巻<br>9 |
| 2．論文標題<br>教育実習における成功・失敗や自己有用感と適応や教職アイデンティティとの関わり－2018年度教育実習に関する調査結果報告－ | 5．発行年<br>2019年 |
| 3．雑誌名<br>群馬大学教育実践年報 | 6．最初と最後の頁<br>37-40 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>佐藤浩一 | 4．巻<br>68 |
| 2．論文標題<br>教育実習の振り返りにおける自伝的推論－自伝的記憶の３機能と主題的一貫性に着目して－ | 5．発行年<br>2019年 |
| 3．雑誌名<br>群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編 | 6．最初と最後の頁<br>157-178 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>佐藤浩一・新藤慶 | 4．巻<br>36 |
| 2．論文標題<br>群馬大学教職大学院の修了生への調査からみられる教職大学院の成果と改善点の検討 Ⅳ－面接調査に基づく児童生徒支援能力・学校運営能力の評価－ | 5．発行年<br>2019年 |
| 3．雑誌名<br>群馬大学教育実践研究 | 6．最初と最後の頁<br>165-185 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>佐藤浩一 | 4．巻<br>58 |
| 2．論文標題<br>自伝的記憶と自伝的推論（日本教育心理学会第60回総会 準備委員会企画シンポジウム3 自伝的記憶と成長の関係を考える－生涯教育の様々なステージで－） | 5．発行年<br>2019年 |
| 3．雑誌名<br>教育心理学年報，58，263-265． | 6．最初と最後の頁<br>263－265 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.5926/arepj.58.263 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>佐藤浩一 | 4．巻<br>58 |
| 2．論文標題<br>認知心理学・教育心理学を授業に生かす－教職大学院を中心にした取り組み（日本教育心理学会第60回総会 研究委員会企画シンポジウム2 学校教育実践に教育心理学の研究はどのように貢献するのか） | 5．発行年<br>2019年 |
| 3．雑誌名<br>教育心理学年報 | 6．最初と最後の頁<br>309-310 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.5926/arepj.58.307 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>佐藤浩一 | 4．巻<br>10 |
| 2．論文標題<br>教育実習におけるリフレクションや周囲からの支援と教師としての成長感－2019年度教育実習（A実習・B実習）に関する調査結果報告－ | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>群馬大学教育実践年報 | 6．最初と最後の頁<br>85-91 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>佐藤浩一 | 4．巻<br>70 |
| 2．論文標題<br>教育実践経験に対する自伝的推論と教職アイデンティ－成功経験と失敗経験に着目して－ | 5．発行年<br>2021年 |
| 3．雑誌名<br>群馬大学共同教育学部紀要 人文・社会科学編 | 6．最初と最後の頁<br>207-216 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>佐藤浩一 | 4．巻<br>38 |
| 2．論文標題<br>教育実習での成功・失敗経験に対する自伝的推論－教職アイデンティティや適応との関連－ | 5．発行年<br>2021年 |
| 3．雑誌名<br>群馬大学教育実践研究 | 6．最初と最後の頁<br>297-305 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

| |
|---|
| 1．発表者名<br>佐藤浩一 |
| 2．発表標題<br>教育実習におけるリフレクションや周囲からの支援と成長感 |
| 3．学会等名<br>日本教育心理学会第62回総会 |
| 4．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| 1．発表者名<br>佐藤浩一 |
| 2．発表標題<br>自伝的記憶と成長との関係を考える－生涯教育の様々なステージで－ |
| 3．学会等名<br>日本教育心理学会第60回総会（招待講演） |
| 4．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| 1．発表者名<br>佐藤浩一 |
| 2．発表標題<br>学校教育実践に教育心理学の研究はどのように貢献するのか？ |
| 3．学会等名<br>日本教育心理学会第60回総会（招待講演） |
| 4．発表年<br>2018年 |

〔図書〕　計2件

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>太田 信夫、中條 和光 | 4．発行年<br>2019年 |
| 2．出版社<br>北大路書房 | 5．総ページ数<br>160 |
| 3．書名<br>学習心理学 | |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>日本基礎心理学会 | 4．発行年<br>2018年 |
| 2．出版社<br>朝倉書店 | 5．総ページ数<br>608 |
| 3．書名<br>基礎心理学実験法ハンドブック | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

群馬大学HP
https://www.gunma-u.ac.jp/
https://sites.google.com/gunma-u.ac.jp/kyoshoku/

6．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|